
中学生

ムネソラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中学生

【Nコード】

N0144Q

【作者名】

ムネソラ

【あらすじ】

小学生の頃から親友だった二人の少女。当然彼女らは成長し二人は中学生になりました。

学生時代、成長するにつれ友達との関係が微妙に変化した体験を、皆さんもしたことがあるのではないのでしょうか？

「今日学校くるとき道端に花が咲いていたんだけど、あれって何の花だろう？」

突然、朝の挨拶も無いのにサキはそんなことを言い始めた。

「ナノハナも捨てがたいんだけど、私的にはコスモスもすてがたいんだよねー！」

サキはよくこんな風に突然話しかけてくる。小学校よりも前から知り合いな私としては、もうなれてしまった。

ふむ、なにになにに…、サキは学校にくる途中の通学路で名前とか良く分かんないけどお花を見つけたらしい。たぶんそれがとっても綺麗なお花でどうしても私にそのお花のことを伝えたかったんだと思う。本人の予想ではそれはナノハナかコスモス…す？

…：それって全然ちがくない？

「えー！　そうかなー。だって綺麗だったんだよー！」

あー…：はいはい…：。サキにとっては、綺麗なものはナノハナかコスモスなんだね。

「でも、エルメスも捨てがたいんだよねー」

「エルメス？」

「うん、そう。この春のモデルがさー、ちょー高いの！」

「エルメスじゃあ…：ねえ」私ら女子中学生には無理な話よ…：。

「うん。だから今日学校終わったらモンブランやけ食いする！」

「それじゃあまたお肉着くよ」

「あーそれは言わない約束ー」

ホームルームの前の時間。サキと私はよく…：というより毎日二人で話をしている。

家が近いせいもあって昔から親友な私たち。いつも登下校まで一緒だったんだけど、中学に入って私は陸上部、サキは「めんどくさい」と帰宅部になって、私は朝練とかで登下校は別々になった。

それでも私とサキは変わらず仲良しで、登下校のときに何があったとかよく話してくれるんだけど、サキ一人で何かやってたりとか聞くと、なんだかごめんって言いたくなる時がある。サキはそんなの前々気にしてないってそんな感じだけど……。

サキは先生が入ってきてホームルームが始まると、ぴよんぴよんと私の席から自分の席に戻っていく。ここは田舎の学校だから1学年に1クラスしか無い。だから、サキとクラスが離ればなれてことは無いけど、部活とかは人数が少なくて寂しいな。

まだ私の陸上部は個人競技で数が少なくてもいいけど、そういえば小学校のときの高田君とかはこの学校にやりたい部活無いから遠くの中学に通ってるらしい。

そっかぁ…、もう私2年生なんだよね……。

この春で中学二年生になって、小学生だった頃から1年も経っていた。そう思うと「短い」より「長かった」って言った方がいいよな気がする。

ってことは、サキと登下校しなくなったのも1年経つんだなぁ…。そう思うとやっぱり早いのかな？

日か暮れ始めて陸上部の練習はお開き。部室にシャワーとか付いてるといいのになぁと思うんだけど仕方ないからタオルで汗を拭いて着替える。

学校から私の家までの帰り道からちよつとずれると海がおつきく見渡せる市道があって、私はちよど夕暮れの時間だし綺麗な夕焼けが見れると思って、そっちの道から帰ることにした。

昔はよくサキとこの道を並んで歩いた。今一人なのは寂しいけど、そのときのことを思い出しながら歩くとちよつと楽しい気持ちになる。

あれ……、サキ…？

しばらく夕暮れ沿いの道を歩いていると、目の前に海を見つめるサキが一人たたずんでいた。

「サ―、……え？」

私はサキの名前呼ぶの、ためらった……。

そこにいるサキの横顔、それは良く知ってるサキの顔なのに、私の知らないサキの顔でもあった。遠くの夕日を見つめて、海風がその髪をさらさらかきあげる。セピアの世界の中でサキは、胸元に大事そうに花を抱えていた。

サキ……？

「……あっ！」っとサキは、じっと見つめていた私に気がついたみたい。

「サキ……、どうしたの？」まるで今までのサキじゃないみたいだった。

「ん？ モンブランはやっぱりやめ。だってモンブランばかり食べてたら飽きるしいゝ」

ここにいるのは、いつもの……サキ。

「……それ？」

「それ？」

私はサキの胸元に抱えられた花を指差した。なんかもう生えてた土ごと持ってきたみたいで、手や抱えた胸元なんか土だらけで、その汚れた制服どうすんだろ……。

「えへへへえ、これ家で育てんのっ！」

サキは子供みたいな笑顔で笑った。

もしかしてサキって今いつもこんなことやってるの？

「だってさ、綺麗じゃない？」

サキの動きにあわせてその小さな花が揺れる。

そりゃ、綺麗だけど…。

今日私たちは久しぶりに帰り道を一緒に歩いた。

よく見るとサキは私より身長が伸びていて、私はちょっとだけどサキを見上げるようになっていた。

「サキその花……」

「ん？ なに？ ダメ！ あげない！」

「そうじゃなくて……」 その花は……。

——うんっ、そうだ！ そうしょっ！

「サキ！ この後その花植えて着替えたらさあ、家こない？ 久しぶりにお泊まり会しようよ！」

「え！ いく、いくよ、お泊まり会！ なんかちょく久しぶりじゃん！」

その後私たちはサキの家でいったん分かれて、私の家で集合することになった。

「……たぶんサキは、本当に知らないんだろうな」

私は家に着くまでの道を歩きながらつぶやく。

あの花、あの花は前、花図鑑で見たことがある。名前が特徴的だったから、覚えていた。花言葉とかも見て、なんだかとても悲しいお花だと思って……。

あの花は、わすれな草……。

たぶんサキは本当にただ綺麗だからあの花を摘んだんだろうけど……、

「サキ、ごめんね……」

今日は、いっぱい楽しもうね！

(後書き)

ライトノベル調のものが書きたいと思って書いてみました。はつきり言って挑戦といった感じですが。若干僕が中学生の女の子を書くのに無理を感じましたが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0144q/>

中学生

2011年1月7日18時25分発行